琉球大学学術リポジトリ

木泊村跡確認調査概要報告：平成24年度調査中間報告

メタデータ	言語:
	出版者: 沖縄科学防災環境学会
	公開日: 2022-07-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 山本, 正昭
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019385

木泊村跡確認調査概要報告

ー平成24年度調査中間報告ー

山本　正昭（沖縄県教育庁文化財課）

要　旨

1．はじめに

本報告は2011年度トヨタ財団研究助成「沖縄・奄美島嶼社会における行政防災施策・制度・システムの歴史的変遷に関する包括的研究」を主題として、宮古諸島の下地島で津波によって廃村となった木泊村跡の実態を把握するために、今年度から実施している確認調査の中間報告である。

先島諸島における津波被害については1771年の明和津波に関する記録、伝承が多数を占めている。一方で明和津波以前における津波に関する記録、伝承についてはかなり乏しい状況にある。希有な事例として、宮古島市の下地島にある木泊村が明和津波以前の津波についてまとまった形での伝承が残されているのがある。あまり触れられることのなかった明和津波以前における宮古諸島地域を襲った津波の実態を明確にしていく目的で当該村跡における実態把握のための確認調査を平成24年から実施した。

2．木泊村概要

木泊村について文献資料で最も詳しく記されているのは1743年に編纂された『宮古島記事仕次』に所収されている下地村の海霊にまつわる伝承についての記述である。この海霊にまつわる伝承すなわちヨナタマの伝承は下地島において集落が存在していたことと、その集落が廃村となった経緯を表している。

このヨナタマ伝承は「下地島に下地村（木泊村）があり漁師が『人面魚躰』の物言う魚、ヨナタマを釣り上げた。魚は食するために、漁師によって炙られながら『迎えをよこせ』としきりに物を言いっていた。これを見た集落の母子は恐ろしさのあまり、隣の伊良部村に逃れた。翌日になって村へ帰ると、津波より村は無く、すべて洗い流されてしまっていた。」と、以上のような概要となる。

この文献資料には続きがあり「今にいたりて其村の跡形はあれ共、村立はなくなりにけり」とある。この中での「今」とは1743年のことであるため、明和津波より古い時期にかなりの規模の津波がこの下地島を襲ったことが分かる。

過去にこの下地村を対象とした津波の研究はあまり成されておらず、わずかに『伊良部村史』において「木泊村」の記載が確認できる程度である。この資料においては通り池の南側に「木屋原屋」が記されていることからこの一帯を木泊村の比定地であると考えられてきた。

しかし、宮城勝保氏が過去に通り池の北側を木泊村跡であるとの聞き取りを得たという話から、その厳密な場所については未だ明確にされていない。また、現地における聞き取りでは通り池の北側に続く浜を「きどまり浜」であるという証言が得られたため、通り池より北側に木泊村は存在していた蓋然性が高いと考えられた。

３．調査内容

これまで、5 月 26 日～27 日と 6 月 23 日～24 日の 2 回にわたる現地での確認調査を実施した。

第 1 回目は下地島北西部に広がる原野地の一帯を対象にして調査を実施した。下地島一周道路から西側海岸へ至る里道に沿いながら表面踏査を行ったところ、北側海岸において石積み、集石などの遺構を確認することができた。

石積みは石灰岩の自然石が用いられており、高さは0.5～１m、崩落が著しくわずかに根石部分のみが残存している箇所も見られた。平面構造は平場を石積みで囲繞した空間と通路状の有しているのが確認された。周辺は平坦地が広がっており、南側の里道を挟んで溜池と擂鉢状の窪みを確認することができた。更に、これらの遺構群から北へ 15m の地点には小舟が接岸できるほどの小さな砂浜が立地している。以上のように当該地点は集落としての要素を具備していることから木泊村跡の最有力候補地として挙げることができる。しかし一方で遺物については表面採取できなかった。本報告ではⅠ地区と仮称しておく。

更にこの遺構群から南へ 400m離れた位置において東西方向に延びる石積み遺構を確認した。残存高は約 50cm と低く、また石灰岩の自然石を使用しており、それらの大きさは区々である。周辺は平坦地であり、南側に溜池が立地している。遺物は採取されず、周辺には現代遺物が散乱していた。本報告ではⅡ地区と仮称しておく。

第 2 回目の調査ではⅠ地区の範囲確認のための伐開と平面略図の作成、Ⅱ地区の石積み遺構範囲確認踏査を実施した。

Ⅰ地区では東西方向に石積み遺構が展開していることと、遺構群から南側において集石遺構が３基、更に津波石と思われる石灰岩塊が４個確認することができた。また、Ⅱ地区においては東西方向の石積み遺構が北側へ分岐しているのが確認された。この北側へ延びる石積みも石灰岩の自然石を用いており、残存高は 0.5mほどとなる。Ⅰ地区の遺構群と比較して、土地区画としての石積みである可能性が指摘された。

４．小括

これまで触れてきたように、通り池北側一帯においては様々な遺構が点在していることが今回の調査において明らかにすることができた。しかし、遺物が表採されなかったことから木泊村跡としての可能性は指摘できるものの、確定するまでには至らなかった。

かつて、宮古島市教育委員会の久貝弥嗣氏が通り池の南側一帯の踏査を実施した際に、全く遺構、遺物などは確認することができなかったとのことから、木泊村跡の位置は今回確認された遺構群もあわせて考えるとやはり通り池北側一帯と想定された。

以上のことから今回報告した遺構群を「伝木泊村跡」と仮称し、今後においてこの伝木泊村跡における更なる遺構の確認と木泊村跡に関する痕跡の確認を行っていきたい。

参考文献

・伊良部村史編纂委員会『伊良部町史』伊良部村役場　1978

伝木泊村跡遠景（北東から）

Ⅰ地区集石遺構

Ⅰ地区石積み遺構

Ⅰ地区津波石

Ⅰ地区石積み遺構

Ⅱ地区